

## 明治後期、家庭修養書の中の〈キュリー夫人〉

— 社会問題が生んだ挿絵の求心力 —

岸 あゆり

### 1 はじめに 問題意識とアプローチ方法

キュリー夫人（マリイ・キュリー、1868—1934年）は、一九〇〇年『東京物理学学校雑誌』に「新元素を発見せしキュリー（curie）夫妻<sup>①</sup>」として、海外の科学新発見のニュースとして紹介されてから、日本の科学界の進歩に大きく影響を与え続けてきた。

キュリー夫人は「伝記」を始め、「映画」「小説」など様々なメディアに書き込まれ、流通した（本稿において、言説上のキュリー夫人を〈キュリー〉と呼びたい）。キュリー夫人の与える影響は一九〇〇年から現在にまで、それも科学界にとどまらず、とりわけ女子教育に及んだのである。そうはいっても、キュリー夫人は女子教育において常に模範的存在だったのではない。あるときには女子の教育の自由を制限する足かせともなり、あるときには女子の可能性を大きく広げる存在ともなったのである。

本稿は、一九〇〇年（明治三十三年）から一九一一年（明治四十四年）の明治後期にスポットを当て、「家庭修養書」におけるキュリー夫人のイメージを明らかにすることを主眼としている。筆者は前稿<sup>②</sup>において、明治から大正の長いスパンを俯瞰し、〈キュリー〉が表象として機能する場を、メディアとの関わりにおいて、明らかにしようと試みた。本稿は明治後期を取り上げ、前稿では取り上げられなかった背景にも目を向け、女子教育の転換期であった一九二〇年代の「前史」を描き出すものである。先述したように、男性優位の科学分野で功績を残したキュリー夫人は、女子の教育が「いかにあるべきか」という問題を投げかける存在であったのだ。

明治後期、キュリー夫人は主として「家庭修養書」の「伝記文」というメディアで流通した。しかし、なぜ、「家庭修養書」なのか。そこで、本稿では「伝記文」というジャンルの背景を分析することによって、学校教育とその外側の「教育」との相互関係に光を

当てることを試みた。言うまでもなく、テキストにはその時代背景や思想が織り込まれている。織り込まれた（キュリー）の糸をときほぐし、どのような背景の下で、また、誰のどのような意図で、そのメディアに取り込まれたのか検討したい。

本稿は以上のような問題意識に依拠しているが、女子教育に関する先行研究<sup>3)</sup>に多くを負っている。これまた言うまでもないが、女子教育は、社会学や教育史の中で研究されてきた。社会学や教育史の手法における数量的・統計的な研究には、国語教育研究は及ぶことはできない。しかし、織り込まれている（キュリー）を定点観察していくテキスト分析という方法は、国語教育研究しかなできない有効な手段であろう。

次章では、まず、明治国家がどのような女子教育を目指していたのかを確認したい。そして明治後期に流通した「伝記文」に書き込まれた（キュリー）を分析したい。

## 2 「内助」という新しい道德

まずは、明治後期が女子教育にとってどのような時期にあたるのかを確認しておこう。明治国家は、西洋の思想を吸収した森有礼や中村正直などの啓蒙思想家たちを中核に据え、教育政策をおこなった。森有礼は産業革命後のヨーロッパの女性を理想とし、そこで展開されていた女子教育論を取り入れた。啓蒙思想家たちは徹底した男女分職をとり入れ、「女は男よりも低いものではないが、男が外、女が内（家）をつかさどる」と主張した。明治国家は、江戸時代以来の儒教の教えの下で隷属的立場にあった女に、未来

の国民を育てる妻・母としての期待をかけ、国民の一部に統合したのである。

妻・母となるためにまず必要だったのが、教育であった。そこで提唱されたのが、良妻賢母教育である。明治後期は、そのような国家の働きかけの下で、男子の就学率に及ばなかった女子の小学校就学率が飛躍的に伸びた時期である。女子の中等教育への要望も高まり、女子の中等教育機関にあたる高等女学校の設立を命じる高等女学校令が公布（一八九九年）された。それ以前にもミッシン系スクールで女子の中等教育はおこなわれてきたが、それはあくまでも少数に向けての教育にとどまっていた。しかし、明治後期は、高等女学校の数が二〇〇校を超え、生徒数は五万を超えたことで知られている。それでもまだ女子全体の少数に過ぎないが、女子の高等教育の始動期と言えることは間違いない。また、この時期には日清戦争（一八九四年）日露戦争（一九〇四年）という国家間の大戦争が起こっている。戦争の勝因として、日本における女子教育普及が称揚されたことはつとに指摘されてきた。ますます女子教育は国家富強のために疎かにできないものと見なされるようになったのである。

ところで、国家からはもちろんだが、肝心の女子教育サイドが女子にどのような役割を期待していたかは確認しておくべきだろう。ここでは高等女学校の修身教科書を使いたい。

「女子専用の修身書を」という現場の強い要望があり、文部省から『高等女学校用修身教科書』が一九〇一年に発行されている。これは一九〇一年、一九〇四年、一九〇七年というように改版を

重ねたのだが、高等女学校教授細目が公布された一九〇三年を境に「大いに修正せしめ」た（『官報』一九〇四年四月二日発行）のである。この「修正」が、日清戦争によって女子教育が体系立てられた結果と仮定し、ここでは一九〇四年発行の『高等女学校用修身教科書』第三巻を用いる。そこには女子への期待はどのように記されているだろうか。

『高等女学校用修身教科書』には、「家族に対する務」の一つとして「夫を助くべきこと」という項目がある。

「夫を助くべきこと」

夫は多く外に出でて一家を支ふる計画をなすものにして、妻は内にありてこれを助け、一家の細事を掌りて、家政を整ふべき任務あり。欧米諸国の有様を見るに、妻にして夫を補助してその事業をなさしむるもの多し。然るに我国にありては、妻は唯家事を掌れば事足れりとして専ら夫の業務に容喙せしめざる風ありて、貞操従順の美德を備ふるもの多けれども、よく夫を補助する功績あるもの少し。（中略）されば平素その任とする所を守り、これを尽すと共に、又間接に夫の業務を助くる所さかるべからず。（傍線は岸）

これが訴えるところは、家庭内役割だけではなく、「欧米諸国」のように、夫の事業（仕事）を補助することである。家事など家庭内役割にのみ徹する旧来の女の役割とは、一線が引かれている意味では新しい。しかし、ここで注意したいのは、女が仕事をも

つなどして「直接」社会へ働きかけることを推奨されているのではなく、あくまでも、夫の事業の補助をすることで「間接」的に社会への貢献を求められているということである。それが「内」を「助」けるといふ「内助」の意味であると定義できるだろう。

しかし、このような修身書の定義する「内助」は、広まりつつあった高等女学校で女が学問をするなどして、「内助」の範疇を逸脱していく危険性もついていた。たとえば次のような発言は、女子教育を家庭内役割に「とどまらせる」ものとして、注目できる。

私の考では女子教育の目的は女子の学者を作るのでは無いという考であります。それならばどう云う目的を以て女子教育を為すべきであるかと云ふに之は有力なる妻を作るにあると思ひます。を以て為されたる女子教育に由ることと信じて居ります。（井上哲治郎「女子教育談」『巽軒講話集初編』博文館、一九〇二年）

夫人は何故に学問せねばなりませんか、女子は何の為に学問するのでせうか、女子が学問するのは学者となる為でせうか、物識りとなる為でせうか、又は教師となる為でせうか、いや、いや、決してそうではありません。（松原岩五郎『女学生の栞』博文館、一九〇三年）

「内助」と「学問」との葛藤の中で、中等教育を受け始めた女子を家庭内役割に制限しようという思惑が見られる。

では、キュリー夫人のメディアへの出現を追ってみよう。キュリー夫妻が新元素を発見したニュースがもたらされた一九〇〇年以降、キュリー夫人に関する言及は見当たらない。しかし、一九〇六年に荷車に轢かれた夫ピエール・キュリーの訃報がもたらされ、「化学者たる夫人の知識技能を併用したればなり」<sup>⑥</sup>、「博士のらぢうむ発見は夫人の熱心なる援助に負う所多し」と語られ、ピエールの功績を支えていたキュリー夫人の姿が前景化されることになるのだ。新聞は、以上のような夫を支える妻（キュリー）のイメージを捉えて、次のように書いている。

ラザウムと云ふ元素は諸君は既にその名を聞いておらるるだらう、仏蘭西のキュリーといふ先生が、御夫婦でその研究室で発見せられたものです。キュリー先生は昨年巴里の街で馬車で過つて轢死なされましたが、その夫人は助手を使って今でも大いに実験を重ねられておらるるそうです。こう云うのは實に内助の婦人の亀鑑と申してもよいだらうと考へます。オットこれは横道。（傍線は岸、一九〇七年二月一日『読売新聞』記事）

ピエールの功績を支え、これからも故人の意思を継承し続けるために研究に励むキュリーを「内助の婦人の亀鑑」として捉えたのだ。ここから二つのことが指摘できる。一つ目は、「内助」という言葉が大衆に浸透していたこと。二つ目は、新聞メディア上では、「内助」はすでに家庭内役割には限定されていないことである。

先に確認したように、やや保守的な女子教育家は女子の学問を家庭内に制限しようとした。そのような動きが生じるのも、この「内助」と「学問」という葛藤こそ、明治後期の女子教育が抱えていた「矛盾」であつたからであろう。この時期の（キュリー）はまさにこの葛藤を一身に受けて、表象されたのである。

### 3 「家庭修養書」の中のキュリー夫人

この章では、学校教育の外側に視点を移し、明治後期において、キュリーが「家庭修養書」の「伝記文」のレトリックについて検討する。明治後期において、キュリーの姿は多く「伝記文」として家庭修養の場で流通していく（表1参照）。

- |  |
|--|
| <p>① 西洞たみの訳編『偉人に及ぼせる夫人の感化』1908年、内外出版協会（「科学者キュリーの夫人」）<br/>         （「the Romance of Womans Influence」 by A.Corkram.London.1906を翻訳・編集したもの。）</p> <p>② 松浦政泰編訳『近世名婦伝』1909年、大日本文明協会（「賢妻キュリー——化学界の大黒柱」）</p> <p>③ 高須芳次郎（梅溪）『東西名婦の面影』家庭百科全書第32編、1911年、博文館（「良人を助けて科学上の新発見を為す（学才兼備の夫人スタロドウスカ）」）</p> <p>④ 松浦政泰編『婦人美譚：下巻』1911年、精美堂（「夫妻共同の研究」）</p> <p>⑤ 前田雪子『偉人の妻』家庭百科全書第37編、1912年、博文館（「仏国物理学者 ピエールキュリーの妻（マリア・スクロドヴスカ）」）</p> |
|--|

表1 キュリー夫人が描かれた伝記文  
 (1900年から1911年)

いくつかある伝記文の中でも、本章では初期に書かれた表1-①の『偉人に及ぼせる夫人の感化』（西洞たみの）を検討したい。

翻訳者の西洞たみのは日本女子大学校国文科を卒業し、その後、日本女子大学校附属高等女学校教諭となる人物である。同書「はしがき」によれば、この書は、一九〇六年にロンドンで出版されたアリス・コークラン「The Romance of Woman's Influence」を編訳したものである。内容は、「多く他のために身を献げて奉仕したる婦人の事歴生涯」を紹介し、婦人の功績は社会に出ている男子と匹敵するものであって、それぞれ活躍する場所に違いはあれども、女は男と同等の価値と功績があると、男女分業・男女平等を説くものとなっている。そのため、次のような主張がなされている。「婦人は必ずしも社会の表に立つて自ら事をなさむと求むるには及ばじ」。一般的に現在考えられている男女同権は、男女関係なく社会の表に立つというイメージをもつが、当時の男女同権とは、それぞれ別の守備範囲で活躍するがために、それぞれに平等という考え方であったのだ。西洞の文にもこの思想が表れている。

西洞の描いた〈キュリー〉はどのようなものであったのだろうか。結論から言えば、描かれたのは、家庭内役割を果たし、夫の事業を補佐する「内助」の賢妻キュリーである。その姿は、「昔から学問で父や教師の助けをするのが使命であった」と言わんばかりに、幼少期に起源を求められ、「学問」と「内助」の葛藤は解消されている。そこで「内助」する〈キュリー〉のいわば象徴ともなったものが「前垂」（エプロン）であった。

夫人の稚きや、長き前垂を掛け、箒を手にして父の実験室に入り、或は書物の塵を払い、あるは器械の整頓をなす等、何異れとなく父の手助けをするを常とせり。彼女は父の実験を見まもり、其の仕事がいかん忍耐を要するものなるかを知ると同時に、瑣細と思はるる研究のいとも大きな結果をもたらすことに、興をおほえざるを得ざりき。かくて、彼女の注意深き性質と精密なる頭脳とは、養ひ育られつつ、其の科学的趣味は年と共に発達し来れり。（中略）学校に於ては、学生たると同時に教師の助手たりき。

（西洞たみの訳編『偉人に及ぼせる夫人の感化』）

幼い時は父の手助け、生徒としては教師の助手をし、結婚すれば夫の内助をするというように、キュリーを〈主〉に対して〈従〉、〈光〉に対して〈影〉の存在として、幼少時から位置付けている。女子が達するべき「内助」する女性という「成功」の地点から描かれているのである。幼い〈キュリー〉が身に付けている「長い前垂（エプロン）」は、伝記文の読者には、〈キュリー〉の働きを、家庭内につなぎとめる効果をもったのである。

また、興味深いことに、この「前垂」姿の〈キュリー〉は、後続の伝記文である松浦政泰編訳『近世名婦伝』（表1-②）にも引き継がれている。ここでもやはり「前垂」姿のキュリーが「父の片腕」「教授の助手」として甲斐甲斐しく働いている。さらに、高須梅溪『東西名婦の面影』（表1-③）には「前垂」の文字はなくとも、その挿絵には、夫、ビエール・キュリーの傍らで実験に従事

するキュリーは、ちゃんと「前垂」を身につけているのである（図版2参照）。

図版2 前垂（エプロン）を掛けたキュリー夫人



国立国会図書館デジタルコレクション（国立国会図書館デジタルコレクション（ndl.go.jp）より）

「前垂」が家事をする時にだけでなく、夫の実験の助手をする時にも書き加えられており、「家庭修養書」において、「前垂」姿の（キュリー）は、すでに当時の読者にとって「記号」化し、家庭の象徴となつていることがうかがえる。

つまり、「前垂」という「記号」は、キュリーの働きを家庭内に制限する、ある意味、読者を抑止する役割を果たしていたと思われる。また、それだけではなく、「前垂」は読者に、生き生きと甲斐甲斐しく家政をつかさどり、夫の手助けをする「家庭」の（キュリー）の想像をかき立てる力をもっていた。

女子教育において問題となっていた「内助」と「学問」の「矛盾」はこのようにして、「家庭修養書」の中で解消させられていた。「前垂」姿の（キュリー）という「記号」は、女の学問を外に逃がさない役割を持つていたし、研究（学問）をしながらでも内を助けることは可能なのだというメッセージを発していると言つてよいだろう。

#### 4 女学生堕落問題と「家庭修養書」

前章では、明治後期の家庭修養書の中の（キュリー）を分析し、「内」にとどまる（キュリー）を視覚化するレトリックが施されていることを明らかにした。しかし、学校の修身書で提唱されてきた「内助」が、やや家庭的な姿が強調された形で、家庭修養書にも反映されているというだけであれば、ここでとりたてて「問題」として取り上げる必要もないように思える。そうではなく、ここで問題にしたいのは、そのような家庭的な姿の（キュリー）が、なぜ、他ならぬ「家庭修養書」の中で求心力をもったのかということである。メディアという磁場に働く力学を問題にしたいのだ。

「家庭修養書」はどのような意図の下に書かれたものだったのだろうか。そのヒントとなる言葉が、表1④松浦政泰編「婦人美譚下巻」にある。この本は古今東西の婦人の伝記文を収録したが、その巻末に編者である松浦政泰の「跋」として「今日は事実の時代である。統計の時代である。空論は人を動さず。理屈は世を尽せない」と書かれている。収録された五四一人の伝記文の「事実」の「統計」の重みを強調したものとみてよいであろう。では、こ

こで、「空論」「理屈」とは何を指すのだろう。同書には女子教育家の三輪田真佐子による「序」が掲げられている。これは「空論」と対置させて、「伝記文」という真実の記述を称揚する意図が見える。

千百万言の空論、時に益なきあらざれども真に世道人心を導くに足るものは、実践躬行の活文字ならんかし。現代、女子の為に著述せらるるもの、日に月に多きを加ふるは、全く文化の賜にして、こよなき幸にこそ。さはあれども、空論と同せんも不可なきものも、決して少しとせず。況んや世道人心の為め如何はしきものもあるめり。実に口惜しき限りになん。  
(傍線は岸松浦政泰編『婦人美譚 下巻』の三輪田真佐子による「序」)

「現代、女子の為に著述せらるるもの」を「空論」とし、対立項として「実践躬行の活文字」、つまり「伝記文」を称揚しているのである。では、この当時読者であった女学生に向けられた「空論」とは何を指すのか。

一九〇七年、女子教育家の嘉悦孝子が当時の女学生の風儀と読書について苦言を呈している。嘉悦は「近頃女学生の風儀が一般によるしからぬ事実」があるとして、当時社会問題として語られていた「女学生墮落」の原因を、「其誘惑物は何か、小説です。神聖なる文芸界より駆逐すべき、下劣なる小説であります」と断じている。

私は某高等四年級四十五人に対して、教科書以外何を愛読せるかと問へるに、「女学世界」「女子文壇」「少女界」等、雑誌を愛読せるもの七人、「兵營気焔」、「旅のしるべ」等の愚劣なるものを愛読せるもの五人、「女夫波」「不如婦」「父兄弟」等の小説を愛読せるもの實に十九人の多きに至り、「婦女鑑」「報徳記」等の修養に資するもの僅かに三人に過ぎず、愛読書なしと云うもの十一人、彼等の年齢は十六乃至十八歳のもの、…そぞろに寒心に堪へないのであります」(嘉悦孝子・津川梅村『主婦の修養』平民書房、一九〇七年)

このように述べ、「不健全なる妄想、煩悶より小説に行きつつある彼らの前途」を憂慮しているのである。実際、「女学生墮落」は明治後期において社会問題となっていた。その「墮落」の原因として目されたのは、小説に描かれた「恋愛」だったのである。

明治後期の女学生への「墮落」という汚名の経緯については佐伯順子『色』と『愛』の比較文化史<sup>14)</sup>に詳しい。佐伯は、明治三十年代を女学生数が「世間の注目的になる程度に数が増えながらも、少数のエリート性を失わないでいる」時代と指摘し、高等教育を受ける女学生は明治知識人の提唱した「愛」の実践者としての期待を受けた反面、それを破ったときの汚名をなぜか一方的にかぶったと述べている。

その世間の余波を受けたのか、女子教育家の厳しいまなざしを、嘉悦孝子の口調から感じられるだろう。嘉悦の挙げた「女学世界」

「女子文壇」「少女界」という雑誌は、女学生の読み物であったが、修身的な徳目に沿うものではなく、女子の不幸な人生を暗示させるものが多くあった。そのせいで「女子文壇」は「我国従来の子教育方針たる良妻賢母主義に背反する傾向ある」として、発禁処分にもなっている。

また、「魔風恋風」（小栗風葉）は女学生の恋愛を描いたし、「不如帰」は社会の暗黒面を描いた社会小説として知られている。嘉悦の挙げた作品や雑誌は、女子教育が目指した良妻賢母教育とは相いれるものではなかったのである。

「女学生堕落問題」と題して新聞は女学生のスキヤングラスな記事を書き立て、その模様は総合雑誌にもいささか度が過ぎていた。このように社会状況の下で、急速にクローズアップされたのが「事実」としての伝記の力だったのだ。ここで、先ほどの『婦人美譚』に戻ると、排撃されていた「空談」とは、「小説」であったことがはつきりする。

もう少し女学生言説を探ってみよう。正岡芸陽『理想の女学生』が「女学生堕落」問題について、「将来の日本国民の良妻たり賢母となつて、第二の国民を生まなければならぬ所の大責任のある女学生が：万が一にもさる忌まわしきことが、あつては大変である。云うまでもなく其のようなものは、将来の妻たり、母たるの資格を失つたものである」と述べているのは、すでに挙げた新聞雑誌の影響の下にあることを思わせるが、こゝも述べている。

（女学生は）一つ恋愛小説を読めば、直にその主人公になりたがり、演劇を見れば、その女主人公になつてみようなど飛んだ謀反を起こすものである。しかしてこれは学校で聞く修身よりも大いなる感化力を有するものである。

学校の修身よりも小説の「淫靡なる小説の青年男女を感化する力」（正岡芸陽）の強いことを憂慮するのだ。このように、学校教育への期待値は、社会問題の影響によって高下されてきたのである。そして、そのような失墜した学校教育の陥穽を埋めるものが、家庭教育であつたと思われる。

興味深いことに、先の嘉悦によって否定された「女学世界」にはその誌面上に、『家庭百科全書』（三十七巻に表1-5）の『偉人の妻』が所収されている）の広告が掲載されている。その広告には「学校に在るの日には概ね理想の学修に止まるが故に實際の応用の臨み、或いは学ぶ所高尚に過ぎるか、然らざれば未だ不十分の憾みある所以なり。」「ここに於いて本書は、最良なる家庭教師たる目的をもつて編述発行し、敢えて婦人教育の欠点を補わんと欲するなり」と、学校教育と家庭修養の補完関係を強調する点が見受けられる。「女学生堕落問題」に直面した学校教育の失墜を利用して、家庭修養書が力を伸ばしたといえるだろう。

単なる広告戦略であつたといえはそれまでだが、広告として一定の影響をもつほどに、大衆が納得しうる論理をもつていたといえる。「女学生堕落」の要因の一つとして見なされた「女学世界」から、学校修身の失墜を経由して、「家庭百科全書」へ向かう――



この奇妙な共犯関係にある読書の中で、「内助」という徳目は求心性を高めていったであろう。(キュリー)がなぜ他ならぬ家庭修養書で享受されたのかという問いに対しては、以上の説明でもって答えたとしたい。享受の背景には、「女学生墮落問題」という社会問題がはからずもクローズアップした「事実」の重みという力学があったのである。家庭修養書の「前垂」姿の(キュリー)はこのような言説配置の下で享受されたものであったのだ。

## 5 おわりに

本稿では、まず女学校の修身教科書を検討し、明治後期において女子に求められた「内助」を確認した。しかし、新聞に取り上げられた(キュリー)はすでに女学校の修身書の「内助」の定義を逸脱していたのである。そのような逸脱を制限するべく、家庭修養書の(キュリー)は「前垂(エプロン)」をつけ、家庭内役割が強調された形で表象されていると考えた。

なぜ、そこまでする必要があったのか。その背景を当時の「女学生墮落問題」を鍵に検討した。小説という「空論」に対置させられた「事実」という重みの中で、前垂姿の(キュリー)は享受された。そこには女子教育家たちが求めた良妻賢母の望みがかけられていた。そこで、新聞の言説とは異なり、家庭内役割に寄り添ったものとして「前垂」姿の(キュリー)は描かれたのだ。「前垂」姿の(キュリー)は、富国強兵という国家的要求の中で女子の可能性を広げようとする欲望と、当時の「女学生墮落問題」の下で女子の逸脱を抑止しようとする懸念が、相克して生まれた表

象だったのである。

表象は、さまざまなメディアが影響し合う磁場の下に置かれている。本稿で問題としたのは「学問」と「家庭」の葛藤の中で、「内助」規範に囲い込まれていく(キュリー)像である。しかし、(キュリー)という「表象」が真価を発揮するのは、大正期、女性の社会進出が進んでからである。その時、どのような背景で、どのような力が働いて、(キュリー)が社会と接続していくのか、この問題の分析は次稿に譲りたい。

## 注

(1)「雑報」(『東京物理学校雑誌』10巻11号、東京物理学校、一九〇〇年)

(2) 拙稿「一九〇〇年～一九二〇年代、読書の中の(キュリー夫人)——女子教育の文脈とメディアに注目して——」(『早稲田大学国語教育研究』三八集)

(3) 代表的なものとして小山静子『良妻賢母という規範』(けいそう書房、一九一一年十月)を挙げたい。小山は良き妻、良き母を育てるという「良妻賢母教育」の変遷を、女子修身教科書を用いて、江戸時代から昭和初期までのスパンで分析した。江戸時代の教育においては、女は夫に服従することが求められ、妻や母としての能力は期待されていなかった。しかし、明治時代になり日清戦争・日露戦争を経て、戦時における女子の働きに注目が集まり、女子の「国民」としての能力に期待が向けられるようになり、良き母、良き妻を育てるという「良妻賢母教育」が女子教育の主軸となってきた。女子修身教科書への分析をおこない、女子の能力を徐々に広げてきた近代の思想としての良妻賢母教育を明らかにした。

(4) 明治国家の女子教育については、李卓「学と不学の違い…近代中日女子教育の比較」(『日本研究…国際日本文化研究センター紀要』二十四巻、二〇

〇二年二月)を参考にした。

(5) 一八九五年には約45%だった小学校女子就学率(女子のうち就学した者は約145万人)は、翌一八九七年には約50%、一九〇〇年には約70%と伸張し、一九〇六年には約95%にまで達した。(文部省『学制百年史料編』、一九七二年九月)

(6) 高等女学校数が二百校を超えたのは、一九二一年のこと。生徒数は5万4千人を超えた。(文部省『学制百年史料編』、一九七二年九月)

(7) たとえば、細川潤次郎「国力と女子教育との関係」(『大日本教育会雑誌』165号、一八九五年五月)に「女子教育も固り教育の一部分なる上は、其盛不盛は多少其国の強弱貧富に関係せる者なりと謂ふことを得へし。余は此度の事件に付き稍感ずる所ありて、始めて広く海外諸国を通覧するに、其国の富強十分ならず、若くは貧弱なるくに」国々は必女子教育の振はざる国々なり」とある。

(8) 一九〇〇年、全国高等女学校長会議にて修身教科書編纂を文部省に建議した。女学校の修身教科書は中学用師範学校用のものが使われていたが、「甚不適当」として文部省が委員を選定して編集した。(『教育報知』641号、一九〇〇年)

(9) 『高等女学校用修身教科書』第三卷(文部省発行、初改訂3版)。調査には「広島大学教科書コレクション画像データベース」(<https://dclib.hiroshima-u.ac.jp/text/>)を用いた。

(10) 「ピエル・キュリー教授の変死」(『東洋学芸雑誌』一九〇六年六月)

(11) 「キュリー博士の逝去」(『教育界』一九〇六年五月)

(12) 「女学校小学校に備えて、修身倫理の材料」とする目論見があると、いわゆる凡例に書かれており、この本の読者として高等女学校生徒または小学校女生徒が想定されている。

(13) 嘉悦孝子・津川梅村『主婦の修養』平民書房、一九〇七年

(14) 佐伯順子『色』と『愛』の比較文化史』岩波書店、二〇一〇年

(15) 一九一三年五月の『教育時論』(101号)に「去月一五日発行の女子文壇は、風俗壞乱の廉価により、去月二一日其筋より発売を禁止されたり、コハ文部省が近來婦女子にして不健全なる思想を抱くものあり、我國従來の女子教育方針たる良妻賢母主義に背反する傾向あるより、之れが取締をなすべく、内務省と協議する処ありたりと傳へたる、折柄なれば女子文壇は此良妻賢母主義より來れる新しい女取締の鋒尖に触れて、最初の血祭に上げられたるものなるべし」とある。

(16) 平石典子の論文「墮落」する女学生女学生神話を巡る考察(二)(『文藝言語研究文藝編』四十卷、二〇一一年十月)は、小杉天外「魔風恋風」はヒロインである女学生初野が墮落から身を守り戦うストーリーをもつといひ、女学生に期待されていた当時の「墮落女学生」という言説に注目する。

(17) 新聞の書き立てる「女学生墮落」問題について、警鐘を鳴らす立場の雑誌もあった。たとえば、「近頃都下の新聞紙は毎日の如く女学校墮落のことを書き立て」(『文部省が寄宿舎に入れる方向を検討しているが、これは男女七歳にして席を同じくせず主義の復活なので、賛成できない。』「折角多年の屈服の境遇から飛び出して自由の立場にある婦人を、女学生墮落云々の故をもつて再び元の屈服の境遇へ帰らしむると勿れ」(『六合雑誌』内報「女学生墮落問題」、一九〇二年)などである。また、「女学生腐敗の声」は「二二の新聞が読者の好奇心を動かして」「事実を捏造」「誇大に書き立て」ている(『中央公論』一九〇二年一月)という指摘もあった。

(18) 正岡芸陽『理想の女学生』岡島書店、一九〇三年

(北鎌倉女子学園中学・高等学校)